

# ルオ族の災因論における死者と妖術―邪術

阿 部 年 晴

## 序

ルオ族の社会において病いなどの災厄をもたらす人格的な存在は主として、生者と死者を含めた人間である。死者が生者に働きかける際の様態は、(善い)祖先、憑依霊、怨霊であり、災厄をもたらす生者の代表格は妖術者と邪術者である。本稿では、災因論の観点から、死者と生者(妖術者―邪術者)の比較を試みたい。紙数が限られているので、事例の詳細な記述・分析は別の機会に譲って、個々の要素を概観した後、問題を指摘し、暫定的な解釈と理論的な見通しを提示するにとどめる。

## 一 ルオ族について

ルオ族は、西ケニアからタンザニア北西部にかけて住むナイル系の民族で、人口は約三〇〇万。かつては牧民であったが、現在では農耕が主で、牛牧が従となっている。都市部に住むものも多く、官庁、軍隊、大学、商業などの部門でも多数が活躍している。西欧文明に対しては比較的開かれた態度で受容してきたが、同時に伝統文化に対する愛着や誇りも強く、民族芸能の分野での活躍や伝統的宗教とキリスト教の折衷形態としての独立教派の輩出といったことでも知られている。このうち後者は本稿のテーマとも深くかかわっている。

現在のルオ族の祖先に当るナイル系の人々が、小親族集団毎にヴィクトリア湖北西岸(今日のケニア西部)へ牛の群を追って南進してきたのは、一六、七世紀以降の

ことであり、バンツィ系やバラ・ナイル系の諸民族に囲まれた状況の下で、ルオ族としての意識を強めると同時に、異民族をも多数同化して、急速に大部族に成長した。ルオ文化には、バンツィ系諸族から借用したり影響を受けた要素も多く、ルオ族の世界観の研究をすすめるには、周囲のバンツィ系諸族との徹底的な比較を行なうことが必要である。

本稿での考察は、現代のルオ社会で行なわれた調査の結果だけに立脚したものであるから、右記の観点からすれば暫定的なものであるが、比較研究のための出発点とはなろう。

## 二 災因論の概略<sup>(1)</sup>

本稿での対比の各項(死者と妖術—邪術)をルオ人の災因論の中に位置づけるために、まず、ルオ社会で災厄をもたらすと考えられている主要な事象を列挙しておく。

### (一) 神 Nyasaye

神は世界の創造者であり、究極因であり、人間の守護者であるという漠然とした観念はあるが、神が直接災厄をもたらしたり、罪人を罰するという観念はすくなくと

も明示的ではない。しかし、神は究極因であり、かつ、不可解なことや人間が対処の仕様がないう事象は神のせいとされることがあるので一応あげておく。

### (二) 人間

① 死者 死者が生者に災厄をもたらすのは次のいずれかの様態においてである。

(イ) 善き祖先 kwara maber (ロ) 憑依霊 jingri (ハ) 怨霊 ja-chien<sup>(2)</sup>

② 生者 生者が生者に災厄をもたらすのは次のような行為によってである。

(イ) 妖術—邪術 tim juok ロ 呪詛 kuong'o (ハ) 宣誓 ku-ong'ruok に対する違反 (ニ) 禁制に対する違反 chira, dhoch<sup>(3)</sup>

(イ)(ロ)については後で改めてとりあげる。(ハ)(ニ)については、違反の結果としての災厄に見舞われるのはかならずしも違反者とは限らず、近親の誰かが災厄におそわれることもすくなくない。また、違反に対する報いとして災厄を送る主体が誰かをルオ人自身は問わない。

(三) 植物、薬など。邪術師が用いる nawi と呼ばれる植物や、鉱物や動植物の一部などを組合わせてつくられ

た *chico* と呼ばれる薬 || 呪物などは、一種の人格性を帯びていて自分の意志で持ち主その他の人間に災厄をもたらしうことがあるといわれる。しかしこれは実は、*chico* や *Dio* の作用を背後で支えている死者の働きかとも思われ、まだ結論を得るにはいたっていない。

(四) 異常な事象。異常な事象は、適切な儀礼的措置がとられなければ、深刻な災厄を誘発するとして恐れられる。 *dhoch* はその顕著な例である。 *dhoch* は異常事象とそれに随伴する災厄の両方を指す。異常事象とそれに随伴する災厄を同じ事象の二つの側面とみなしてその事象を *dhoch* と呼んでいるといった方がより正確かも知れない。 *dhoch* とみなされる異常事態には、近親相姦、親殺し、猥姦など人間の異常行動と、異常児の出産や動物の異常行動のような自然的な異常事態とが含まれている。 *dhoch* に随伴する災厄はかなり広範な地域社会の全体に広がることありうる。この場合にもルオ人は、災厄をもたらし主体が何者であるかは問はない。調査者が強いて追究すれば、神の業だろうという答えが返ってくる。

(五) その他。ルオ族の災因論にはこのほかにも幾つかの動物や昆虫が登場したりして多彩であるが、本稿のテ

ーマと直接関係がないので省略する。

このリストと関連して是非ともつけ加えておかなければならないことがある。それは、ルオ人がすべての災厄について、その原因となった行為者や送り手を問題とするのではないということである。

たとえば、ある慢性の下痢の原因を占いなどで調べて、それがあつた個人の規則違反 *chira* であることが明らかになつたり、疫病の原因がある *dhoch* だと判明したりすれば、必要な治療と儀礼的措置が行なわれる。しかしこの場合には、違反や異常行動に対して災厄を送つた主体が誰であるかは問題としない。彼らはその答えを必要としないのである。

筆者はルオ語の病名を百以上採集したが、それらの病名については、ルオ人は誰が惹き起したか、といったことは問わない。

つまり、ルオ人は、ここに記載した災因をどのような条件のもとで予想しあるいは必要とし、どのような条件のもとで予想せずまた必要としないのかを明らかにすることが、彼らの災因論を理解するうえで不可欠なのであ

るが、この点に關しては仮説を得るにいたっていない。

### 三 死者

#### (一) 善き祖先 Kwara naber

善き祖先が子孫に対して要求をもった場合には夢枕に立って告げるのがふつうであるが、生者に合図するため、病氣その他の災厄を送ることもある。いづれにしても、善き祖先と生者の交流の主たる回路は夢で、憑依はしない。善き祖先の要求の内容は二つに分けられる。

##### ① 供犠を要求する。

この場合には、生者との接触は一時的で、子孫が集まって供犠を行なえば、夢枕に立ったり災厄をもたらしたりすることはなくなり、すくなくともその後ある期間が生者に存在を顕わさなくなる。

② 生前もっていた名前、業、職能(占いや治療など)を子孫の誰かが継承、相続することを要求する。

この場合には、選ばれた人物が要求を受け入れれば、祖先はその人物の守護霊として、祀る者と守護する者という永続的な人格的な関係を確立する。

守護霊として特定の個人または集団と持続的な関係を

もつ死者(善き祖先)は、広い意味で *jugri* と呼ばれる。狭義の *jugri* すなわち憑依霊と区別する必要があるときは「しゃべらない *jugri*」と呼ぶ。

ルオ社会においては、ほとんどすべての業や占い、治療などの行為は死者の力に支えられてはじめて有効だという強固な信念があるから、広義の *jugri* とみなすべき死者はきわめて多いことになる。

災厄論の観点からみれば、善き祖先が送る災厄は生者に対して要求があるという合図である。

もし生者が死者の要求に応えなければ、災厄は除去されないばかりか次第に深刻になって個人の死や集団の崩壊につながることもありうる。それは、生者が死者(祖先)の要求に応じなかったことへの報いである。しかし、われわれが普通用いる意味で、道徳的な制裁であるとか罪に対する罰であるとかは言い難い。だが、そうしたこととまったく無縁なわけでもない。

道徳や罪というわれわれの概念の意味内容を批判的に検討しなおすために、こうした事例を手がかりにして行きたいと考えているが、ここでは問題の指摘だけにとどめておく。

(二) 憑依靈 *Junagi*

死者の中には、憑依するという形で生者と関係をもつものがある。これが狭義の *Junagi* (憑依靈) である。

憑依する死者は、一方的にある生者を選んで、その個人と個別的永続的な関係を保持し、憑依という形で人格的な交流をもつことを望む。

一般的には、生前憑依靈をもっていた人物が死ぬと、故人に憑依していた憑依靈が、故人の近い親族(父方、母方、姻族を含む)の誰かを選ぶ。生前憑依靈をもっていた人物自身も、死後はたいいて憑依靈となる。しかし、まったく親族関係のない靈が憑依することがあるばかりでなく、異民族の靈が憑依することもある。

憑依靈をもっている人は複数の靈をもっている。祖先の靈とその人物ももっていた(起源不明のものや異民族のものを含む)複数の靈を継承するのがふつうであるが、突然それまで何の縁もゆかりもなかった靈が多数やってきて、憑依状態にある当人の口を借りて次々に名を名乗る、といったことも起る。

憑依靈がある人物を選ぶと、その人物は心身の異常を呈する。精神に異常をきたしたり、慢性病の症状を示し

たり、女性であれば、不妊になったり、離婚を繰り返したりする。こうしたことが、憑かれていることの徴候であり、別の言い方をすれば、靈からの合図なのである。

憑依靈に憑かれているための症状は、憑依靈をもっている霊媒兼治療者の治療を受けなければならぬ。

憑依靈に憑かれている人物の治療には、さまざまな薬も併用されるのであるが、もっとも重要なことは、歌や踊り、マラカスの伴奏や薬などを動員して、患者を憑依状態にし、患者の口を通じて、憑依靈に名乗らせしやべらせることである。その後は、憑依状態ができるだけ容易に起こって、憑依靈がよくしゃべるようにする。

このようにして憑依状態をコントロールできるようになる過程が、薬の服用などとあいまって治療過程となるのである。

憑依靈の中には、選んだ人物が毎朝夕マラカスをふり歌を歌って憑依状態になり、また、要求する供物を与えられるだけで満足するものがあるが、選んだ人物が占いや治療者となることを要求するものもある。そのような憑依靈は、神秘力を与え、かつ、守護靈として、占いや治療の活動の助力をしてくれる。

憑依靈は、さまざまな問題を含んでいて、ルオ族の世界のとらえ難さの一端を示している。

憑依靈の多くは明らかに死者の靈であるが、さまざまなタイプを含んでいる。生者のごくふつうのパーソナリティのそのままの延長と思われるものもいる。ほとんど特定の病気の擬人化と思われるようなものもいる。溺死者の靈ではないかと思われるものもある。

起源がはっきりしないもの、つまり、果して本当に死者の靈かどうかははっきりしないものもある。たとえば Mumbo が如何なる起源の靈なのかははっきりしない。しかし、Mumbo は、最初に Mumbo に憑かれた Bondo という人物の人格を通じて生者にあらわれる。Mumbo に最初に憑かれたのは、Sakwa Location の人 Bondo であったので、その後 Mumbo は Mumbo-Bondo もしくは単に Bondo と呼ばれている。Bondo は Mumbo に憑かれると、村を出て湖畔の葦の茂みに長く隠棲し、村に戻ってきたときには、髪もひげものび放題で、体には葦や貝や魚の骨などがいっぱいこびりついていたという。Mumbo は、しばらくは Bondo の子孫のみに憑いていたが、やがてそれ以外の人々にも憑くようになってい

た。

Mumbo に憑かれると、激しい寒気を感じて日向にとび出し、人里を離れてブッシュや湖畔に隠棲してその間髪もひげも切らない。Mumbo は毛深い犠牲を好み、また治療には、潮水、葦、湖の魚貝などが必要である。

さらに、太陽も憑依靈 (Jugor) であるが、起源がはっきりしない。

一般に人間起源の靈とそれ以外の靈との境界がはっきりしない点が注目される。

憑依靈は一方では親族関係との結びつきが強く、出自集団の祖先であったり、そうでなくても主として出自集団内部で継承されるのがふつうであるが、他方では新しい靈がどんどん出現したり、縁もゆかりもない他人や異民族すら憑くという特徴もある。

憑依靈自体がこのように錯綜した事象であり、靈に選ばれる人物のパーソナリティや社会的位置づけなどについて一般化することはむずかしい。

(三) 怨靈 (Jachien)

他人に強い恨みや憎しみや敵意を抱いて死んだ者は、死後、怨靈となってそのような感情の対象である人物か

その近親にたたって苦しめ滅ぼそうとする。

怨霊となるのは、殺害された者、虐待された者(当然の敬意を払わず世話もしなかった息子を恨んで死んだ父、ウィッチだという無実の嫌疑をかけられてぶたれた後で死んだ女など)、自殺した者などである。

人生において当然経るべき人生儀礼を経ないで死んだ者も親族にたたる。たとえば、殺害されたのに親族が復讐をしなかったかあるいは賠償をとらなかつた死者、正式の葬儀をしてもらえなかつた死者、婚資の牛がないために結婚しないで死んだ男など。

怨霊は大変恐れられている。怨霊の作用について話す人が強調するのは、攻撃の執拗さと内容の異様さ、悲惨さである。

怨霊はねらつた個人や集団からけつして離れず、破壊させるまで執拗に攻撃しつづける。

たたられた人物は、特徴的な悪夢や白昼夢や幻影を見ておびえたり半狂乱になったりする。極度に忘れっぽくなつたり、幾ら食べても満腹感を感じなくなつたり、逆に、ほんのちょっとたべてもすぐ満腹になったりする。体が極度に衰弱したり、皮膚がかさかさ乾いて白っぽ

くなつたりする。

このような段階で適切な措置をとらなければ、やがて、当人が異常な行為を執拗に繰り返すようになったり、重病にかかったり、その屋敷をさまざまな災厄がおそつたりする。

怨霊につかれた者の行状として典型的なのは異常な行為を強迫的に執拗に繰り返すことである。しかも、その行為は怨霊が生じる原因となつた行為であることが多い。ある男が父を繰り返し殴打したりしていると、恨みを抱いて死んだ父はその男の息子に怨霊としてとりつき、とりつかれた息子は父であるその男を殴打するという異常で嫌悪すべき行為を強迫的に執拗に繰り返すことになる。殺害した妻の怨霊にたたられた男は、しばしば、これも強迫的に、女をみれば、もっとも口汚くののしつたり、殺したりするようになる。人々は、この事態を「お前が行なつた行為がお前にとりついているのだ」と表現する。怨霊の力がそれほど強くない場合には、怨霊祓いの専門家 (priest) が調査してくれる灰状の薬を服用したり、その薬を当人の影(が落ちてくる地面)に切り傷をつけてそこに埋めたりするだけで祓うことができるが、怨霊

がもっと強力だったり事態が深刻だったりすると、祓靈師 (Jadhi) を自宅に招き、屋敷の成員が全員参加して、他人はまじえないで、怨靈祓いの儀礼を行なってもらう。

怨靈にとりつかれるのはかならずしも恨みがあった当人とはかぎらない。当人の近親特に子や孫がとりつかれるのもめずらしくない。われわれには、とばっちりであると思われるが、彼らはそうは考えないようである。

災厄は怨靈がとりついていることの徴候といえまい。なくはないが、死者が生者に送る合図ではなく、死者の作用の目的そのものである。

怨靈についてはこの外にもわれわれの観点からは理解の困難な点がある。

怨靈となつて出る人物はふつう同情に価する被害者である。しかるに、一度、怨靈として生者に現われると、慰撫の対象とはならず、詫びもされず、悪霊として祓われるだけなのである。事実、夢や幻影に現われる怨靈は、生前どれほど近い人物であろうと、たとえ父や母であろうと、よそよそしく、冷たく、敵意と害意に充ちている。それは、不可解な悪の化身へと変貌したかのような印象を与え、この印象がまた恐怖心をかきたてる。

聖書の Satan や devil を jachion (怨靈) と翻訳することは、われわれには適切でないと感じられるが、多くのルオ人が納得しているのはこのような背景があるからであろう。

一般に死者が生者に現われるときは、何らかの象徴的な性格を帯びていることが多い。

#### 四 妖術と邪術

妖術と邪術においては、生者の感情や意志やそれらに起因する行為が災厄の原因となる。

##### (一) 妖術と邪術

行為とその結果の關係が直接的で誰の目にも明らかで物理的暴力などを用いないで、私的に、反道徳的反社会的に、他人を攻撃したり加害したりする行為を総称するときルオ人は、*lin jnok* (Jnok の行為) という表現を用いる。そのような行為をする人物は *jajnok* (Jnok の人) である。

明示的には表明しなくてもルオ人は、妖術と邪術を区別しているようである。すくなくとも用語法にはそのような区別が表われている。*jajnok* を狭義で用いる

といわゆる妖術者を意味するが、広義に用いると、そのほかにいわゆる邪術者をも含むことになる。

(二) 妖術者 *jajnok*

ルオ社会における妖術者、つまり狭義の *jajnok* には、「夜の妖術者」もしくは「夜走る人」と「眼の妖術者」すなわち「邪視者」とがある。

① 邪視者 *jajnog wang*

邪視者はたいてい女であり、その能力 (*Wnok*) を母親から遺伝的に継承するが、それが実際に活性化するのは結婚してからだといわれる。邪視の女が、人が食べている食物を嫉妬や羨望や悪意をもって見ると、その食物は腐ったり消化されなかつたりして、食べた人は腹痛を起す。

腹痛を起した人は、それが邪視のせいだと思えば、邪視専門の治療者である *Jatak* に治療してもらう。*Jatak* は患者の腹にカミソリの刃などで切り傷をつけ、そこに口を当てて腹痛の原因となっている胃の内容物を吸い出すとともに薬を与える。

邪視でやられるのは子供が多く、たいていの人が腹部にこの種の治療を受けたときの切り傷を一つや二つはも

っている。

邪視の中には、牛乳の出を止めたり、作物の生育を妨げたりするものもあるといわれる。

直接観察したわけではないが、インフォーマントに聞いたこととしては次のようなこともある。

邪視の力は常に作用するわけではない。その女が食事のところへ来合させたようなとき、「今日は客が来ているから気をつけてくれ」とやわらかく警告しておいて食事を共にすれば被害はない。

② 夜の妖術者 *Jajnog orienuo*

夜の妖術者は、その行為から、「夜走る者」とか「夜踊る者」と呼ばれることもある。このタイプもきわめて一般的でどの地域社会にも数人はそれと目されている人物がいる。

夜の妖術者はたいてい男で、父親から遺伝的に継承するが、*Wnok* が活性化して実際に走るようになるのは、十四、五歳以降であるという。

夜の妖術者は、嫉妬や敵意を感じさせる人物の死を願って、夜裸でその人物の家のまわりを走りまわり、草屋根と壁のすきまから土を投げ込んだり、ドアを開けた

り、小便をしたりする。

ルオ社会では、他人の死を先き取りするような行為は大変悪いこととされ、広義の *fin jnok* に含められる。

裸で家のまわりを走るのは、ふつうは葬儀のときだけであり、土を投げこむのは埋葬を意味している。夜の妖術者の行為は相手の死を先き取りする行為なのである。

しかも、妖術者の悪意ある願望は実現する可能性が大きいと考えられているから、一見実害のなさそうな夜の妖術者の行為が怖れられ嫌悪されるのである。

行為の実的な効果という観点からすればさまざまにタイプの妖術者—邪術者のなかで夜の妖術者がもっともあいまいである。それにもかかわらず、妖術者や邪術者のうち夜の妖術者をめぐって悪のイメージがもっとも活発に増殖しており、このこと自体も解明されるべき問題であろう。

夜の妖術者は、墓場から死体の腕を盗み出してもって走り出会った人をそれで打つ。出会った人の首をしめることもある。走っているときに口から火を吐く。

ワニ、カバ、ハイエナ、ヒョウなどと特別の関係にある。そうした動物を手なづけていて、背に乗って走りま

わるだけの者もいれば、動物に変身したり、動物を使って人を傷つける者もいる。

はつきりとはしないが、夜の妖術者と同性愛的な振舞いとを結びつけるインフォーマントもいる。

### ③ *fin jnok* の観念

妖術者に当るルオ語は *fin jnok* である。*fin* は人、行為の主体、事物や属性の所有者を示す接頭語であるから、この語は「*fin jnok* の持ち主」を意味する。

*fin jnok* とは、非人格的な神秘力である。*fin jnok* には邪悪さと不可解さという観念ないしイメージがつきまとう。

この力を遺伝的に継承して宿している人々がいる。後天的に儀礼などを通して獲得することも可能である。

一度個人に宿った *fin jnok* はその個人のパーソナリティの一部となるが、なかば自律的な力として個人に働きかけもする。*fin jnok* は妖術者を激しい感情や衝動のように内部からつき動かす。妖術者はそれに抵抗できないし、*fin jnok* につき動かされて行動しているときには、かならずしもはつきりとは意識しておらず、後で気づいて後悔するようなこともある。

他方、妖術者の嫉妬、憎しみ、怒りなどの感情は自動

的に *jnok* を活性化し発動し、それらの感情を惹き起した人物は *jnok* の有害な作用を受ける。

邪視の女は、他人が食事をしているのを知ると、特に相手が嫉妬の対象であったりすると、のぞきたいという衝動に抗することができない。この状態をルオ人は、「彼女のうちに *jnok* が活性化した」「*jnok* が彼女をとらえた」「彼女は *jnok* を感じている」という風に表現する。

そういう状態で食物を見ると、見られた食物は変質して、食べた者は腹痛を起こす。このことを「彼女は *jnok* を与えた」という。

夜の妖術者についても同じようなことが言われる。眠っている妖術者の *jnok* が活性化してくると腹がふくれあがり、やがてはね起きて外を走る。

妖術者が、自分ではコントロールできない力につき動かされているという考えは、妖術者に対する態度や取り扱いに影響を及ぼしていると思われる。

ルオ人が妖術者（特に夜の妖術者）について話すときに示す軽侮と同情と恐れと好奇心のまざった態度は印象的なものである。

かつては夜の妖術者は現場をおさえられると、尻から鉄棒で申刺しにする刑にされた、という人もいるが、すくなくとも現在のルオ人の態度は、それとはかなり異なる。妖術者は現場をおさえれば打つてもよいが、殺してはならないと主張する。殺すと殺したものが *jnok* を身につけてしまう。

### (三) 邪術

すでに述べたように *jandaga* は、狭義には妖術者だけを指すのであるが、広義には妖術者と邪術者の両方を含む。妖術者が *jnok* を自動的直接的に発動させるのに対して、邪術者は、薬その他の物質と呪文とを用いて発動させる。邪術者のさまざまなタイプを示す名称には、妖術者の場合と異なり *jnok* という語は含まれていない。

ルオ社会では邪術はきわめて盛んで、邪術師の種類も多いが、ここでは代表的なものとして、*jandaga* と *jandaga* だけを紹介しておく。

① *jandaga* は動物の死体に特別の薬を加え、目指す相手の名前とその相手に起るべき事態（病気や事故など）を唱えた後、相手が通る道などに埋めておく。相手がそこを通ると、*ndaga* が作用する。名前を唱えた相

手だけに作用する。

ndagla とは、薬と呪文を加えられた動物とその効力のことである。

ndagla は、近い親族の間でも、土地争いや嫉妬が原因でしばしば用いられる。

ndagla をめぐる細則や信念は数多いが、たとえば、仕掛けた後で、仕掛けた者が標的となっている相手と口をきくと効果が失われる。また、被害者の病床を仕掛けた者が訪れて、「もし私の仕掛けた ndagla のせいでは病気がかかったのなら今すぐ治れ」と唱えて食事を共にすると病人は回復するといわれる。

jangdaga は自分自身のために仕掛けるだけでなく、依頼されれば謝礼をとって他人のためにもつくる。

jangdaga の能力は父から息子へ継承されるのがふつうであるが、金を払って獲得する場合もある。

② ルオ族の数ある邪術の中でもっとも恐れられているのは janawi である。

nawi は幾つかの種類の植物で、それを janawi は自分の屋敷内に栽培する。ある種の宿り木がもっとも強力だと考えられている。

janawi は、その植物の小枝を二つに切って各小片を道の両側において、相手がその間を通り抜けるようにしたり、焼いて灰状にして食物に混ぜたり、相手の影の上に落したり、指先につけた切り傷にすりこんでその指で相手を指さしたり、さまざまな用い方をする。この場合にも、相手の名前と起るべき事態を唱えなければならぬ。意図を言表することはあらゆる邪術の不可欠の部分である。

janawi も死後、一種の jngri (憑依しなく jngri) として息子の一人に現われてなかは強制的に janawi にする。

janawi は自分自身の感情にうながされて nawi を用いることもあるが、雇われ殺し屋になることもある。nawi に対する防禦や復讐のためにも雇われることもあるので、雇われた janawi の間で一種の代理戦争が行なわれることもある。janawi 同士が力くらべをして、負けた方が死ぬようなこともある。

janawi になることはそのような危険な状況に身を置くことなのである。

③ 邪術に対しては専門の「禿見屋」がいるし、占師、

藥 (hil) の主、靈媒、キリスト教の独立教派なども反妖術、反邪術の活動をする。

### 五 死者と妖術—邪術の関連

死者と妖術—邪術は共にルオ族の災因論ひろくは世界観の中で中心的な位置をしめているだけでなく、一方では複雑にからみ合い、他方ではそれぞれ排他的に固有の場をもっていて相互補完の関係にある。

#### (一) jnok の継承と活性化に介在する死者

①妖術者(夜の妖術者と邪視者)においては、jnok は親から子へと遺伝的に継承される。邪術者の能力は、他のものもろの神秘力の場合と同じ経過によって獲得される。すなわち、邪術者は死後、子孫の一人を選んで、一種の jnog (憑依しない jnog) として現われて邪術の能力を伝え、邪術活動の守護霊となる。nawi や ndagla を有効に操作できるのは、かつて邪術者であった死者の後循がある場合に限られる。

ここでも生者は死者の「召命」を拒絶することができない。選ばれた者が邪術者になることを拒否すれば死者によって破滅させられる。

②怨霊の力によって妖術者—邪術者にされることもある。人を妖術者—邪術者にすることは、怨霊の恐るべき作用の代表例の一つなのである。

妖術者を殺すと、死んだ妖術者は怨霊としてたまたま、殺害者を妖術者にするといわれている。また、邪術者に依頼してしばしば人を殺していると、殺された人々の怨霊によって邪術者にされ、コントロールできない殺意につき動かされて殺人行為を繰り返すことになる。

③怨霊にとりつかれた人物は、強迫的に異常な行動を繰り返す。この点が夜の妖術者などを連想させる。怨霊の力は、人格をもった死者の力であり、とりつかれた人物にとつては、自分を滅ぼそうとする外的な力である。これに対して、jog は、非人格的な力であり、妖術者—邪術者にとつては、自分のパーソナリティの一部であり願望を実現する力である。

ルオ人もこのように jnok と怨霊をはっきり區別しているのであるが、両者の親近性を感じていることも事実である。

(二) 邪術による怨霊の転移や使役  
怨霊祓いの儀礼においては、怨霊を他人に転移するこ

とがある。これは邪術的な行為であるから、怨霊祓いの儀式は深夜関係者だけで秘密裡に行なわれるのである。こうして、次々に転移されるうちに身元の分らなくなつた無名の怨霊がルオ人の世界には無数に浮遊することになる。

nawi や ndaga を用いて、怨霊を敵につけることは邪術的攻撃の有力な方法となっている。この場合死者は、邪術者によって操作され jnok の作用をになう名前も顔もない力となつて、jnok の体系に完全に連結されている。

### (三) 妖術、呪詛、怨霊

呪詛の効果があらわれると、比喩的にはあるが、「あれは jnok だ」といわれる。また、杵、ある種の植物、土などで人を打ってはならないというような禁止に意図的に違反する行為は、相手にも災厄をもたらすので妖術とみなされたり呪詛とみなされたりする。呪詛したまま解除の儀式を行なわないで死んだ人物は怨霊となつて、生前の呪詛の効力をはるかにうまわる害を及ぼす。ここでは、呪詛を媒介として、妖術—呪詛—怨霊という連合が成立しているのであるが、それを支えているのは、他人に向けられた否定的感情がもつ実効的な効果に

対する信念である。感情は力であるという強固な信念をもっているだけでなく、あるいはもっている故に、ルオ人は感情を力に転化する制度やプロセスを豊富に発達させている。

### 六 死者と妖術—邪術の対比

①死者がもたらす災厄は、死者の人格的な力によって直接もたらされるが、生者の攻撃は jnok という非人格的な力を介して行なわれる。

憑依霊は、新しいものが次々と現われて増殖する。憑依霊としての死者は、太陽、ブッシュ、潮、病気などの本質を分有する。しかしそれらはすべて、ルオ人のコスモスにおいて人間と交流をもつにいたつたものであり、憑依霊の増殖はコスモスを拡大する。

これに対して、jnok をめぐって増殖するイメージは、悪と混沌の領域にむかって広がる。妖術者と動物の親密な関係にしてもコスモスの中に位置づけられるものではない。

この点で中間的な性格を帯びているのは怨霊と邪術者の守護霊としての死者である。

②災厄が意味するものという観点からみれば、生者（妖術者―邪術者）がもたらす災厄は、他人の嫉妬、憎しみ、敵意などの徴候であると同時に、その他人の行為の目的自体でもある。

これに対して、善い祖先や憑依霊としての死者がもたらす災厄の多くは、交流を求める死者の合図であって、災厄自体は死者の働きかけの目的ではない。

怨霊としての死者がもたらす災厄は、生者（妖術者―邪術者）がもたらすものと似ているが相違点もある。

生者が生者を攻撃する場合には、攻撃者の行為を触発したのは、流動的で操作可能な、多分に主観的にとらえられた現在の人間関係や状況である。災厄はそれを送る側の状況認識の徴候だともいえる。

他方、怨霊を生じさせたのはすでになされた過去の行為とそれをとりにまく状況である。

③生者がもたらす災厄は、現在の問題をはらんだ人間関係や状況を顕在化しそれを操作するための契機となる。妖術―邪術においては、加害者も被害者も両者の関係も、無垢ではなく、問題をはらんでいて、当事者や世論の意図的な操作の対象となるべきものである。それ故、災厄

に対処するには、和解するかさもなければ、感情の表現形態ともえる妖術―邪術の応酬によって流動的な状況を操作し合うことになる。つまり、語りのレベル（うわさ話）であれ行為のレベルであれ、Jokeを通じての状況操作という形をとる。そこで起っていることと悪や混沌とのつながりが露呈するという形をとる。これらすべてのことを可能にするのは、個人がJokeを内在化し発動するという現象なのである。

善き祖先のもたらす災厄に対しては、供犠を行ったり職能を継承したりする。つまり、社会組織の基盤を顕在化したり、過去との連続性を形成したりする。このことを可能にするのは夢という現象と長老が行なう供犠である。

憑依霊がもたらす災厄は、「召命」の徴候であると同時に、その生者のアイデンティティの表出であるともみなしうる。これに対しては、霊との人格的な関係を確立するという形で、個人の前までは潜在しておりかつ適切な位置づけと機能を与えられていなかったパーソナリティを顕在化し、コスモロジーの中に位置づける。憑依霊は、コスモスに組みこまれた事象と生者の関係を象徴

しており、憑依霊の制度はルオ人のコスモスの拡大に寄与していると思われる。その制度を支えているのはコントロールされる憑霊という現象である。

怨霊がもたらす災厄は、怨霊を生じさせる因<sup>もと</sup>となったかつてのできごとや状況を生者に再び生きさせるものである。怨霊被いに成功することは、そのできごとを改めて過去に送り返すことであり、ある個人や集団が破滅すれば、それは現在(生者)が過去に対して支払う代償もしくは供犠とみなすことができる。結局怨霊の制度は、かつて生じた逸脱を改めて逸脱として生き、必要ならば犠牲を払って、過去へ送り返し無化して過去との連続性を断ち切るためのものであるが、無化されなかった逸脱は、無名の悪の力として人間世界にとどまる。これらすべてを支えるのが、たたられること *chien* という独自の現象もしくは経験、および祓霊という行為である。これらすべての背後に個体を諸関係の結節点とみなす人間観もしくはアイデンティティ観とそれに対応する災厄観とがある。

## 結語

怨霊も含めて、死者がもたらす災厄は秩序を顕在化したり拡大するための契機となり、生者がもたらす災厄は、現在の状況を操作したり、その状況がはらむ悪と混沌を露呈したり意識化したりする契機となるといえそうである。

災因論の諸構成要素は、ある場合には互いに関連することにより、他の場合には独自の領域を守ることによって、ルオ人の社会的文化的世界のダイナミズムに寄与している。

(1) 下記参照。T. Abe, 1979, *Belief System of the Luo of Kenya, in A Comparative Study of Belief Systems in Western Kenya, An Interim Report of the Project, submitted to the Kenyan Government. Hitotsubashi University, JAPAN.*

(2) 阿部年晴「一九七九「ケニア・ルオ社会における *jachen* についで」『アフリカ研究 第一八号』参照。

(3) 下記参照。T. Abe, 1981, *Chira and Dhooh among the Luo of Kenya, in N. Nagashima (ed.) Themes in Socio-Cultural Ideas and Behaviour among the Six Ethnic Groups of Kenya. Hitotsubashi University, Tokyo.*

(埼玉大学教授)